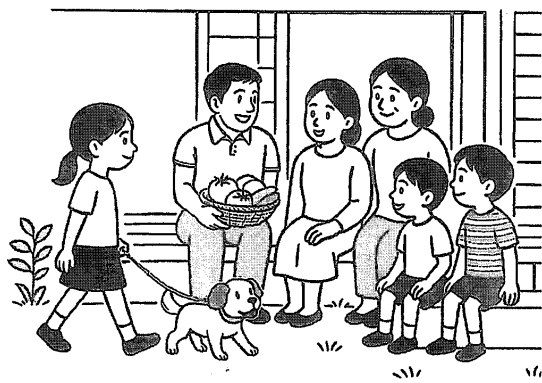




縁側にて ③

試練の先の銀メダル



藤田医科大学特命教授・地域共生社会推進センター長 堀江 裕

ミラノ・コレティナ2026
パラリンピックが先日閉幕し
た。3月13日には、パラスノー
ボードで小栗大地選手が、金メ
ダルに0・08秒及ばずも、堂々
の銀メダルを獲得した。45歳の
快挙。

小栗選手は、もともとプロの
スノーボーダーだった。競技と
仕事を両立させながら、次の舞
台を目指していた。ところが、
32歳の時の事故。工場で約2ト
ンの鉄板が崩れ、右脚が下敷き
になった。

多くの人には、競技人生の終
わりを覚悟する大事故だろう。
小栗選手は違った。救急搬送の
間に思考を切り替えた。義足で
も滑ることはできないか。残さ
れた条件で何ができるかを考え
る。そこからパラスポーツへと
つながっていく。

ここで注目されるのが、勤務
先の社長だ。事故により、従業
員に障害を負わせてしまった。
起きた事故を前に謝罪する。と
ころが社長は謝罪だけでなく、
社員の夢の実現に向け、支援す



ることを選んだ。入院中に頻繁
に見舞うところから始め、競技
用の義足も用意した。最初のパ
ラリンピック、2018年の韓
国・平昌(ピョンチャン)大会に
は、会社で応援団を組んで出か
けたという。

小栗選手と社長の間でどのよ
うな言葉が交わされたかは知る
由もない。ただ、結果として、
支援する側とされる側という関

係にとどまらず、夢の実現に何
が最善かをともに考える関係が
形づくられていったように見え
る。事故が関係を断つのではな
く、別のかたちへと組み替えら
れた。

パラリンピックの輝きのよう
なものが現れた。オリンピック
が「より速く、より高く、より
強く」を競う場だとすれば、こ
こにあるのは、「勇氣、決意、
インスピレーション、平等」と
いった、別の価値体系だ。イン
スピレーションが広がる。

事故に挫けず、夢を実現しよ
うと踏ん張った小栗選手。どう
すれば事故に自分なりに向き合
えるか考えぬいて実行した社
長。パラリンピックが障害者ス
ポーツにとどまらない人々の可
能性を見せた瞬間だ。銀メダル
までの道のりを知ると、より速
くだけではないストーリーが感
じられる。一人ひとりのパラア
スリートにストーリーがある。
私たち皆にあるように。

小栗選手は、銀メダル獲得に
喜びつつ、「目標が残って良かつ
た。」と4年後の2030年フ
ランス・アルプス大会での金メ
ダルの夢を語り始めたという。
夢の高さと強さは誰にも止めら
れない。また別のストーリーを
見せてもらいたい。

縁側にて ②

ほどほどで、明日も楽しみ 大相撲 玉鷲関



藤田医科大学教授・地域共生社会推進センター長 堀江 裕

本年もよろしく願います。

大相撲初場所が始まる直前の入稿で、掲載される頃には結果が出ているのですが…。ここ数場所、玉鷲関から目が離せない。40歳で新横綱・大の里を破るなど、強豪力士を脅かしている。

大相撲は、実力一本で番付で評価される厳しい世界。玉鷲関は、自力で番付を確保し、幕内の大舞台で大活躍。そんな玉鷲関のテレビ画面越しから自然に伝わる印象は、相撲を楽しんでいる姿だ。強い力士には勇敢に挑み、勢いある新鋭に対しては挑戦をはねつける壁となる。勝てばよしよし、負ければ残念、また明日。力みも悲壮感もないのが魅力だ。

41歳での大活躍が話題になっているので報道からいろいろ読むと、第一線で活躍を続ける秘訣は、どうやら「ほどほど」を心得た自己管理のようだ。

玉鷲関は、自らを追い込む稽古や過剰な筋力強化とは一線を



画すとのこと。出場を続けるための最優先は、怪我を防ぎ、土俵に上がれる状態を保つこと

だ。調子が良い時には身体を過度にいじらず、無理しない。相撲力士の印象と違い、お酒を余り飲まず、周囲と群れず。モンゴル出身の妻と子どもふたりと過ごす時間を大切に、趣味は裁縫。モンゴルの大学生だった時、たまたま日本の大学に留学中の姉を訪ねて来日したのがきっかけで、ホテルマンになる目標を変えて相撲部屋に入門したエピソードも、なんとも力が抜けていて、微笑ましい。

一方で、当然だが、勝負への意欲は強く、変わらない。小さ

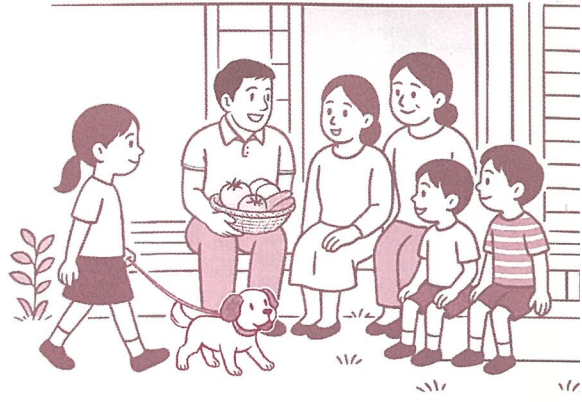
な部屋に所属。同部屋に強い力士がいないとなれば、普通なら出稽古に行きそうだが、玉鷲関は違う。相撲に集中するため外出を控え、同部屋の若手ふたりに一度にかかってこさせて稽古してきたとのこと。現状を憂えず、工夫を重ねて、結果が出せると、してやったり。どうやら相当にポジティブな性格のようだ。結果、優勝2回。それも34歳と37歳と遅咲き。

やや強引だが社会保障の文脈で見れば、玉鷲関の姿勢からは、中高年の就労や社会参加に大きな示唆を感じる。無理に張り切り、自分なりの挑戦を長く続けられることは、健康維持や生活資金確保とは別の次元の自己充足につながる。昨日は一番やって見せた、今日は残念、明日は頑張ろう。玉鷲関が土俵の上で体現しているその生き方を、今後も見つめていきたい。

せつかくの名古屋勤務。名古屋場所の折には、玉鷲関が楽しく稽古する支度部屋を訪ねたい。

縁側にて ①

デフリンピックと コミュニケーション



藤田医科大学教授・地域共生社会推進センター長 堀江 裕

本年11月15日から26日、東京でデフリンピックが開催される。聴覚障害者のための4年に1回の国際大会であり、I O Cから呼称使用を認められている。肢体不自由、視覚障害、知的障害のある選手を対象とするパラリンピックよりも歴史は古く、発足から100年を迎えた。日本では初めての開催だ。

デフリンピックにハンマー投げで既に4回出場し、前回のブラジル大会で見事金メダルを獲得した石田孝正(たかまさ)選手に、愛知県にお住まいのご縁もあり、本学への来学をお願いした。学生に講義、教職員に講演で「金メダリストが語る目標のかなえ方」との演題。5回目の出場が内定していて大会直前で恐縮ながら、学生が夏休みから戻った初日に登壇をお願いした。日常のコミュニケーションの難しさとデフリンピックへの挑戦が話された。

まずは、コミュニケーション。外見では障害が分かりにくい聴覚障害は、人々の理解が得られ



にくい。例えば契約に際し、詳細に理解するために筆談を求め

ても応じてもらえない場合も多いとのこと。それでも、20年前と比べると、手話で話しかけてくれる人が増えていると実感。相手の顔を正面から見ても、可能ならマスクを外し、筆談や音声の文字変換アプリを活用するなど、伝える意思を持つと、コミュニケーションは進む。正確さこそだわらず、積極的に伝えて欲しいと話された。

デフ・スポーツでは、競技のスタートでは「ピストル音」の代わりに「光の点灯(スタートランプ)」が使われる。講義では、医療職を志す看護学生が、違い

に戸惑いながらも、全員スタートダッシュを体験した。縁側から見える放課後の子どもたちのかけつこと似た雰囲気。その場は初めての緊張、笑ってしまうような失敗、そして温かさに包まれた。

金メダル獲得までに4大会を要した石田選手。勝つための秘訣を参加者から尋ねられると、ひと言、「あきらめたら、それでおしまい」とのご回答。

苦勞の多いコミュニケーションも、なかなか順位が上がらなかったデフリンピックの成績も、石田選手は粘り強く取り組み、その精神力は筋金入り。参加者一同、いかなる挑戦も、戸惑ってもひるまず、巧拙で萎縮せず、努力を続ける意義を共有した。

折しも本年6月、国会で手話施策推進法が全会一致で成立した。国連の障害者権利条約に手話は言語と定義されてから20年近く。ここでも関係者のあきらめない決意と努力が結実した。デフリンピック東京開催に間に合っ